北海道知的障がい家族会連合会 会報「ほっと41号」(2023年12月7日発行) 責任者:会長 近藤 正

ほっと41号

ホームページURL
https://dokaren.com

道東家族会との連携

「オホーツク福祉園」と「こまくさ学園」の移転建替えの問題

両施設の家族会は道東家族会及び道家連の会員です。道東家族会は以前よりこの問題に取り組んでいます。

紋別市にある「(株)北海民友新聞社」発行の「北海民友新聞」に詳しい内容が掲載されました。

北海道新聞にも掲載されました。両新聞の記事を掲載します。

北 海 民 友 新 聞　2023年(令和5年)11月23日(木曜日)

3616人分の嘆願書提出

百年記念福祉会　2施設の家族会が宮川市長に

社会福祉法人・紋別市百年記念福祉会(古寺純嗣理事長)が運営する障がい者支援施設の「オホーツク福祉園」と「こまくさ学園」の上渚滑町和訓辺から渚滑地区への移転建替え計画が宙に浮いている問題で、両施設の家族会は20日、紋別市の宮川良一市長に3616人分の署名捺印付き嘆願書を手渡した。

嘆願書は「紋別市街地への移転」という8年来の願いを叶えてほしいとするもので、両家族会は「一日も早く」と切実な思いを話す。

市長へ手渡す前に3616人分の嘆願書と
道東・北海道組織としての嘆願書を見せる
菅野会長(前列左端)と飯田会長(後列左端)

老朽化が課題に渚滑移転を望む　法人・家族会

嘆願書の内容は「これから建つ施設は、子どもたちにとって終の棲家。親も年を取り、送迎も難しくなる。病気を持つ子も多く、骨折や誤嚥(ごえん)になったり、高熱を出したり、いろいろと救急搬送も多くなり、命にかかわることになるので、少しでも病院の近いところに建ててほしい」「福祉の街・紋別の名に違わぬ弱者をいたわる福祉の街であってほしい」「利用者のことを最優先に考え、一日も早く紋別市百年記念福祉会が計画する新天地に施設を建てられるよう、心ある判断と理解をしていただきたい」といったもの。

移転を実現するには、市が道へ提出する「社会福祉施設整備計画に対する意見書」の中身が重要だ。しかし法人によると、今年８月に作成された意見書には「施設移転先の近隣住民一人一人の理解と協力が不可欠だが、地域住民との話し合いが十分でない」「暴風雪時には吹き溜まりによる市道閉鎖が発生する場所」「渚滑墓地に向かい合う場所であり、生活環境上の心配があること」「既存排水可能施設が脆弱な地域のため適正な排水処理が必要であり、道路交通上及び環境衛生上、支障が出ること」「下水道処理区域外であること」など、予定地について否定的な言葉が並んでいた。

このため法人から施設整備補助金申請を受けたオホーツク総合振興局は、昨年度に続き本庁へは上げない“不受理”とし、今年度も建替えに着手できないことが確定した。

臨時総会を開き

こうした現状を打開しようと、両家族会は今月５日に市内で開いた臨時総会で、宮川市長に嘆願書を提出することを正式に決めた。

実際の署名活動は総会に先立ち 10 月上旬から行っており、紋別市内から 2381 人分（全体の 65.85%）、紋別市外から 1235 人分（同 34.15%）になった。

両施設の窮状を知っていた道東知的障がい児・者家族会（飯田壮一会長）と北海道知的障がい家族会連合会（近藤正会長）も賛同し、「一日も早く紋別市街地への移転が実現できるよう全会一致でこの嘆願書を提出する」として、個別の嘆願書を用意した。

菅野会長は「なぜ移転できないのか、何かあるのかと市民にも聞かれる。家族会として何ができるかを考え、嘆願書を提出することにした。今の状態を市民に分かってもらいたい」と苦しい胸の内を明かす。いっぽう、会員の一人は「1000 人くらいを目標にしたが、3600 人を超える方にご賛同いただいた」と多くの署名が得られたことに驚きを隠さない。

今回の嘆願書活動は両家族会が行ったものだが、古寺理事長も臨時総会で「私たちが市にお願いしたいのは“普通の意見書”を書いてほしいということだけ。それさえ実現したら、移転が進められる。嘆願書に込められたそれぞれの思いをくんでもらい、利用者、家族、ここで働く職員の幸せを一番に考えてほしい」と話していた。

家族会など 11 人　市長らと面談

20 日、宮川市長らと面談したのは、こまくさ学園家族会の菅野友二会長、道東の飯田会長、両家族会の会員８人、それに家族会と市側を取り次いだ野村淳一市議の計 11 人。菅野会長が 3616 人分の嘆願書を宮川市長に手渡し、飯田会長も道東・全道組織としての嘆願書を添えた。

嘆願書提出は非公開となったため、両家族会は引き続き市民会館で記者会見を開き、渚滑移転に対する思いや宮川市長らとの懇談の様子を語った。

それによると、菅野会長は「今の施設はバリアフリーでもない不自由な施設。子どもを思う親として、普通に生活できる施設に一日も早く行かせてあげたい」、近藤会長は「道東は 12 家族会 850 人、全道は 80 家族会 7000 会員。その思いをすべて込めて、嘆願書をお持ちした」といった思いを伝えて、宮川市長に嘆願書を手渡した。家族会の他の会員も「入所者の平均年齢は 55 歳を超え、親の半分は死亡した。現に動ける家族会もほとんどいなくなってきた。また建設が遅れると、新しい施設を見ず無念の死を遂げる人も出てくることになる。その思いで嘆願書を集めた。この思いを受け止めてほしい」などと市長に訴えた。（嘆願書のうち 50 枚には利用者や家族の切実な思いも記述されている）

これに対して宮川市長は「家族会の皆さんの思いを受け止めたい。法人には（上渚滑）地域と、これから行く（渚滑）地域の理解を得ていただく努力をしてほしい。（北海道へ提出する）次の意見書には、皆さんの思いを反映させたい」などと応じたほか、「市役所も間に入って、地域と法人が協議する場を作りたい」などと述べたという。稲葉宏剛副市長と西田尚市保健福祉部長も同席したという。

「家族の思いは伝わったと思う」

面談の様子について野村議員は「移転建替えには反対していないが、場所については言及しなかった。地域に理解してもらう努力を法人がしていけば、何らかの可能性があるのではないかと感じた」と印象を語る。菅野会長も「以前の面談よりも、前向きな言葉だった」と述べ、会員の一人は「私をしっかり見て話してくれたのが印象的だった。たぶん家族の思いは伝わっていると思う」と話した。この会員は「上渚滑の地域の方にはとてもお世話になりお礼も言った。それから年数が経ち、子どもたちも年齢を重ねている。上渚滑の人たちに理解していただき、温かく見守って送り出してほしいと伝えた」とも話していた。

体調不良のため今回は来られなかったオホーツク福祉園家族会の榎本繁会長（津別町在住）は５日の臨時総会で「自分たちの子どもや兄弟たちが、最後に楽しく笑う姿を見て、自分の人生を終わる。今日はそのような気持ちで出てきた。何かがあった時にすぐに広域紋別病院へ行ける場所へ、両施設を移転させてもらいたい」と強い願いを語っていた。

築 30～40 年経過　老朽化が課題に

同法人は 1982 年７月に設立され、翌 83 年４月にオホーツク福祉園（授産施設）を、10 年後の 93 年４月にはこまくさ学園（厚生施設）を、それぞれ上渚滑町和訓辺の隣接地に開設した。

2015 年 10 月、その時点で築 33 年と老朽化が進んでいた福祉園の家族会から施設建替え要望が出され、法人は翌 16 年８月、紋別市へ「移転建替えに関する支援について」の要望書を提出した。その後、法人内組織の建設委員会は 19 年１月に「建設場所は利用者・職員の確保ができると思われる紋別市渚滑町地区」とする意見書を理事会へ提出。理事会は翌 20 年７月にこれを審議し、賛成多数で採択した。計画している新施設は転倒防止のためバリアフリーやプライバシー確保に配慮するほか、災害時には地域の避難所となることも想定。建設予定地は農地のため転換が必要だが、土地所有者とは話が付いているという。

いっぽう上渚滑地区の経済人などで作る「福祉園・こまくさ学園を上渚滑に残す会」は、上渚滑地区内での移転建替えを要望し、法人との意見は平行線のまま。市の仲立ちよる対話の再開が求められている。

北 海 道 新 聞　　2023 年（令和５年）11 月 27 日（月曜日）

紋別・上渚滑の法人 中心部へ建て替え計画　障害者施設、移転巡り膠着　家族は環境改善に賛同　地域は残留要望し難色

＜オホーツクＲＥＰＯＲＴ＞

【紋別】社会福祉法人「紋別市百年記念福祉会」（古寺純嗣理事長）が進めている、二つの障害者支援施設の移転建て替え計画が膠着（こうちゃく）状態に陥っている。現在の上渚滑地区から市中心部の渚滑地区へ移す構想だが、上渚滑地区の住民は地区内での建て替えを要望。市は地域住民の理解を得るよう法人に求め

ているが、両者の意見は平行線のまま。一刻も早い解決を求め、施設の家族会は２０日、宮川良一市長に移転への理解と支援を求める嘆願書と署名を提出した。

「入所者の平均年齢は５５歳。親としては少しでも早くバリアフリーで不自由なく生活できる施設に行かせたい」。宮川市長に嘆願書を提出後、記者会見した家族会の会員らは切々と訴えた。

福祉会は「オホーツク福祉園」「こまくさ学園」を運営。「福祉園」は１９８３年、「こまくさ学園」は９３年の開園で、現在、２施設合わせて１００人を超える入所者・通所者がいる。

建て替え計画は２０１５年、福祉園の家族会が老朽化した施設のバリアフリーや個室化などを法人に要望したことで動き出した。法人は内部協議、地元関係者や市への説明などを進め、２０年７月の理事会で現在地から約１５キロ離れた渚滑町への移転を正式に決定した。

法人は渚滑町を選んだ理由について《１》地域の拠点病院で精神科がある広域紋別病院に近い《２》市中心部の方が職員を確保しやすく、家族や通所利用者も通いやすい《３》近隣に商業施設があり、買い物をしたりと利用者の楽しみにつながる―などを理由に挙げる。古寺理事長は「市街地への移転は法人がこれから生き残っていくための決断」と理解を求める。

一方、上渚滑地区にとって、移転計画は衝撃だった。両施設は上渚滑地区の地域振興事業として誘致され、長年支援し、交流を深めてきたとの自負があった。地元経済人らは地区内での建て替えを求め、１７年に「残す会」を結成。メンバーの一人、阿部秀明市議は「どうして上渚滑ではだめなのか。環境を変えることが利用者にとって本当にいいことなのか、よく考えてほしい」と再考を訴える。

法人と地元との議論はかみ合わず、コロナ禍もありここ３年ほどは両者が話し合う場は設けられていない。

市は移転について「歴史的な経緯もあり、地元理解が不可欠」との立場を取る。法人が施設整備の補助金を国と道に申請するには市町村長の意見書が求められるが、今年８月の意見書では「十分な利用が見込まれ、障害のある人の居住の場として必要な施設」とする一方で、住民説明が不十分であることや、立地、協力医療機関の確保、資金計画などの課題を指摘。法人は昨年度に引き続き本年度の申請を見送った。

そこで家族会は、現状を打破しようと今年９月末から署名活動を展開。約１カ月で市内外から３６１６筆の署名が集まり、今月２０日の提出につながった。家族会によると、宮川市長は「市が間に入って地域と法人が協議する場を設けたい」と答えたという。

家族会の一人は「上渚滑のみなさんには感謝しかない。誤解があるならそうした部分も含めて話し合い、一日も早い移転につなげたい」と希望を託す。

（須藤幸恵）